
セカイノハテ

希沙良 栖依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セカイノハテ

【NZコード】

N3418M

【作者名】

希沙良 栖依

【あらすじ】

異世界に飛ばされた聖夏（主人公）が、いきなり処刑されて、その国の皇子の体で目覚めて自分を殺した国に復讐しようとする、が・

・・・「なんだこの国の借金はー！」

基本お人よしの主人公が目的のために頑張る話です。
もともとの掲載サイトMOLTOの方もよろしくお願いします。

少し話をまとめました。内容はなにも変わっていません。

聖夏は死んだ。

いきなり、殺されたのだ。

彼がそれを理解したのは、自分の首が処刑場にさらしものとして置かれた時だつた。

血の氣のない、いつも鏡で見慣れていた顔を見たとき、聖夏は初めて意味がわからなかつた。

なぜ、自分は自分の、胴体のない首を見ているのだらう？

聖夏は自分のみたものが信じなれなかつた。

もし、本当に自分が死んだのならば、今の自分は何なのだらう。

（もしかして……、いや、もしかしなくとも、今の俺は幽霊なのかな！？）

序章（後書き）

す、すいません・・・！
短いです。rz

応援よろしくお願ひします。

1・まさかの出会い

(ふむ、まさに、その幽靈なわけだが……。まさか、落ちて早々に殺されるとま……)

誰に聞こえるはずもない俺の叫びに、まさかの返事が聞こえた。

(ちよつゝ、お前誰!-?)

気がついたら俺の横に長身の男がいた。

(あー? 私か? お前をこの世界に送った

神様

だけど何か?)

神様(?)は腰まであるわらたらの髪を払ってポーズを決めた。その瞬間、俺はこいつは関わってはいけない、いや、関わりたくない人種(?)だと思った。

(なあ、うざいから殴つていいか?)

(やめてくれ。殴られると一応痛いんでな。わつきのはなに、ジヨークというやつだ。

人間、無駄にテンションの高い奴がそばにいたら、たいがい冷静になるものだらう? どうだ? 落ち着いたか?)

確かに神様(?)に言われたように俺は冷静になっていた。まあ、腹はものすごく立つが。

（あ、確かに。じゃあ、冷静になつたことだし教えてくれ。何が、
どうして、になつたか、だ。）

とこりか、お前本当に神様なのか？）

（先に言つておひつ。私は確かに神様だ。と言つても私は、この世界の、神だがな）

（どうこう、意味だ？）

（君もつづかず氣づいているだらうが、この君のいた世界とは違う。
よく言つ異世界とこりやつだな。）

そして、一つの世界につき神が一柱いる。
もちろん、君のいた世界にも神がいた。そしてわざ、言つたように私はこの世界の神だ）

「うわ、どうせどうぞと言つやがつた。うわ。」

なんか、いちいち突つ込んでたら話が進みそつこないから先に進めるが。

（ふむ……わかつた。じゃあ、なんでおれがこの世界に来たかわからぬよな、この世界の神様なう）

（当然。……君がこの世界にきた理由はねえ、私が呼んだんだよ。
君のいた世界の神に許可をもらつてね）

……死んでしまえ、こりやくしょ。思わず手が出てしまつた。

（お前のせいが）

地を這つよつた声を出しながら俺は神の胸ぐらを掴んだ。

（お前のせいで、来たくもない異世界に連れて来られて拳銃、殺されたのか、俺は）

神はただの人間の幽霊を怒らせただけとは思えない慌てぶりで早口にまくしたてた。
てか、こいつ本当に神か？

（初めに言つただろ。私も予想外だつた、と。元々、きみには今死にそうになっている皇子の代わりをしてもらおうと思つていたのだ。君は死なないはずだつた）

俺は自分が死なないはずだつた、と聞いて神の胸ぐらを掴んだ手をぴくり、と反応させた。

死なないはずだつた？

（けど、実際問題俺は死んでるんだが？ だいたい、なんだ？ その、皇子の代わりが俺というのは）

俺は死んでから時間が結構たつてきたせいか、かなり冷静に神の細かい言葉まで拾えていた。

（あ～。まずそれを説明するには、この事を理解してもらわねばならないんだか……。君、パラレルワールド、分かるか）

俺はいきなりの神の質問に眉をしかめながら、漫画や小説などで得た知識を話した。

（確かに、自分のいる世界の隣に別の世界があつて、そこにも自分がいて、この自分と微妙に違う生活を送つてゐ、つてやつだつたか）

（そうそう、それ。それなんだが…………といつうか、君はいつまで、仮にも神様の胸ぐらを掴んでるのかな？）

（そういわれ、俺はしぶしぶ、本当にしぶしぶ手を離した。
神は崩れた襟元を直しながら）

（まあ、これは特殊なんだけど、君にはパラレルワールドみたいに、この世界に別の君がいるのだよ。そして、その君がこの国の皇子といつわけだ。そして、今この国の皇子がいなくなるのは非常にまずい。この国はこの世界の中心と言つて過言ではないほど大きな国だ。そんな国で今、皇帝の後継者が死んで後継者争いが起ころと他の国にまで飛び火して大きな戦争が起つてゐ。それを回避したいのだよ）

（そんなことのために神が出張つてゐるのか？）

俺は不審に思つた。

世界中を巻き込む戦いなら、地球でも最低2回起こつてゐる。
もし、神がそれを嫌がるなら、この地球での戦いもなかつたはず。
といつうことは、この世界での大規模な戦争も地球のある世界の神と
同じような神にとつて止めなければならないというわけではないはず。

俺はその不審を言葉にした。

（だが、地球の世界大戦はきつちり起つてゐるぞ）

（ああ。それは、この世界がまだ出来て間もないからからそんな状

態で戦争が起きるとさすがに世界全体のバランスが色々と崩れてま
すいから私が介入しているのだ。……君をこの世界に連れて行くと
いう方法でね）

俺はこめかみが引きつるのを感じた。

（ほーお、じゃあなんだ、俺は見知らぬ世界に完つ全にそつちの都
合で連れて来られたのか）

俺はものすゞくこい笑顔だつたと思つ。ニッコリ、と効果音がつ
きそうなほど。）

……だけど、きっと神には俺の背後から黒いオーラが見えている
ことだろ。）

仮にも神様だろに、神は冷や汗を出していた。

（……ま、まあ、そういう事になるな。だ、だが、完全にこいつの
都合というわけではないのだ。

……実はだね、本来、君の魂は此方で産まれるはずだつた。

しかし、…………まあ、神にも色々あるんだよ、うん。と、いう
わけで手違いで君の魂が地球のある、まあ、私達神はクシラとその
世界を呼んでいるのだが、そのクシラの方で産まれるはずだつた魂
と入れ替わつてしまつた）

（は？ つて、事は本来、俺がこの世界で皇子やつてたのか？
： そして本来クシラに産まれるべきはずの魂が、こいつで皇子やつ
てたつてことか）

（そういう事。まあ、当然、本来あるべき姿とは違つから多少のゆ
がみが生じてしまった。

オウラが、ああ、こちらの君の名前なんだが、まあ、そのオウラが

病弱になつたのはそういう理由なんだが…………つと、いい加減説明を止めないとオウラの魂が限界のようだ。

彼の魂が体からなくなつた直後じゃないと君は本来の体に入れないと、話はこれくらいにしよう

(なつー)

まだ説明は十分じゃない!と俺が叫ぶ前に、神は俺の前に手を翳した。

俺が、薄れゆく意識のなかで最後に聞いたのは、

(私の名前は『琳希』。何かあれば呼ぶといい)
という、神の言葉だった。

* * * * *

「オウラ様が目覚めました!..」

俺が次に目覚めた時、聞こえた最初の言葉は、俺が今までの人生を捨て新たな人生を歩むことを、如実に感じさせる言葉だった。

2・ま・じ・で・す・か（前書き）

サブタイトルが思いつきましたんでした……。

適当です、はい。サブタイトル変えると思こます……。

いつも短いので長めにしてみました。

ご意見をくださいとうれしいです。

PVが1000突破！！ありがとうございます！！

2・ま・じ・で・す・か

俺が、いや、周りから見たらオウラが目覚めてからの3日、俺の周りは半端なくせわしなかつた。

まあ、そのおかげで、俺がオウラじやないとばれることがなかつたので助かつたのだが。

そして、オウラの目覚めを周りに告げたあの少年は、オウラの従者でカンナという名だつた。何故、彼のことが分かつたかといふと、目覚めて2日も経たないうちにこの世界の神、琳希が現れ、

「君は、今度からオウラになるといつのに、オウラの記憶が無いと不便だろ?。記憶をオウラの魂から抜き取つておいたからこれを君にやるやつ」

と言い、喋ることすら出来ないほど衰弱している俺の頭をガシツ、と掴んで、まあ、普通の人間ならたえきれず死ぬ情報量だが、ただの人間じやない君なら大丈夫だろ?、きっと。という無責任極まりない言葉を吐き、俺が、そんなアバウトな!と感じた瞬間にものすごい情報量が脳に流し込まれ、結局気絶する羽目になりながらもオウラの記憶を受け継いだためだ。

そして、衰弱している身体でろくに動くことの出来ない間、俺はオウラの記憶を探つた。

記憶の中のオウラは、こんな奴俺じやない!と叫びたくなるほど氣弱な少年だつた。身体が弱いせいもあつたのだろうが、部屋に1日籠もつていつも本を読んでいた。

俺はオウラがあまりくわしくこの世界について知らないことに驚いた。琳希はオウラがこの国を継ぐと言つていたのでそれなりの教育を受けていると思つていたためだ。

しかし、それも彼の記憶を探つていくと理由が分かつた。

「この世界には魔術が存在しているらしい。そして、それを使用するとき、その使用者は背に翼が生える。魔力の強い者ほど大きく白い翼が、そして魔力が弱い者ほど黒くくすんだ小さな翼になる。この世界の者はどれだけ魔力が弱かるうと絶対に翼が生える。なぜなら、彼らの祖先は神に飼われていた鳥だと言われているからだ。だから、その祖先の名残として魔術を使用するさい、翼が現れる。・・・・ちなみにこの翼、魔術を使用しないときでもだせて、翼の大きい者は飛べるたりもするらしい。」

そして、オウラのいるこの国『コランシス帝国』は帝位継承の際、最も重要視されるのはこの翼だった。より白く、より大きい翼を持つ者に帝位継承権が与えられる。

しかし、オウラは魔術がつかえず翼を出せたことがなかつた。

そのため、彼は魔力なしとして、帝位継承権がなかつたのである。そして、彼は身体が弱く長時間の講義に耐えることが難しかつたのも一因としてあつた。

俺は彼の記憶を見て、帝位継承権がないなら、こいつが死んでも問題なかつたんじや・・・・と、感じた。実際、オウラの記憶の中で彼には弟が2人いることが分かつっていた。

結局、俺は声を出せるまでに回復したとき、琳希の名を呼んだ。ホントに名前呼んだだけで来たらすごいよなあ、と思いつながら。

「琳希」

「どうかしたのかな」

「え、ホントに来た。暇なのか?」

思わず心の声が出てしまった。俺の枕元にいつの間にか琳希が現れていて、起き上がりがない俺を上から見ていた。……何か腹立つ。

「君は神に敬意の欠片もないな。……暇ではないよ。これでも一応、神なのでね、忙しい身の上なのだよ」

「じゃあ、なんで現れた。…………てか、腹立つからすわれ」

君つて奴は……、とかいいながらため息吐いて、神は目線がベッドに寝てる俺と同じになりよつて、床に座つた。こいつ、結構律儀だな。

「君が入れ替わつて産まれてしまったのは、私達神の不手際で、君はあちらの世界でうまくやつていたのに、こちらの世界に連れてきてしまつたのは完全にこちらの都合だからね。これくらいのサービスはするよ。」

「ふーん。じゃあ、琳希つて大分サービス精神旺盛だな。この世界の言葉も分かるようにしてくれてるし」

読み書きはまだしたことがないから分からぬが、この1週間で喋る分にはこの世界で不自由がないことに気付いた。枕元で医者がしゃべつていてることが分かつたからだ。

はじめは、日本語をしゃべつているのかとおもつたが、そう思いながら聞くと全く違う言語が聞こえたから確實だ。

そしてその言語が俺にも使えるのかは確認済みだ。相手の言つてる事は分かるのに、自分はそれに返事が出来ないとかいう事態になつたらシャレにならん。

だから、確認のためカソナに、水がほしい、って言つたら通じたんで一安心。読み書きもいつか、試さないと。

「あー……、言いにくいくらいだが、その言語理解は君が自分でやつて
いるのだよ」

「は？ どういう意味？」

「君はオウラの記憶で分かっていると思うが、オウラは魔力なし
と言われている」

「実際、そうだろ。魔力があれば生えてる翼がないらしいじゃない
か。というか、この話と言語理解はなんの関係もないだろ」

「まあ、黙つて聞きたまえ。多少、話は長くなるが……」

琳希の話では、実際にオウラに魔力はなかつたらしい。

魔力は魂に付随するもので、あちらの世界、クシラじゃ魔力なん
てものは、あつてもどうせ使えないでクシラに生まれるはずのオ
ウラの魂に魔力がないのは当たり前、ということだそうだ。

ちなみに、こちらの世界でオウラの体が弱かつたのは『魔力なし』
のオウラの魂が周りの魔力にあてられたせいらしい。いわゆる、『
魔力酔い』だと琳希は言つていた。

そこで、こつちの世界で生まれるはずで、しかも次期皇帝になる
よつになつていた俺の魂は半端ない魔力を持っているらしい。

どれくらい強い魔力か琳希に訊いたら「この世界で君に勝てる魔
力量の人はいないよ」と、笑顔で言わされた。（実際、俺が魔力全部

を使って破壊の魔法を使つたら、この国のある地球とほぼ同じ大きさの星を一瞬で焦土に変えられるそうだ。）

「だからが俺がなんでこっちの言葉が理解できるのか、つてことに繋がるんだが、正直、その所の説明はかなりややこしくて半分も理解できなかつた。

まあ要するに、その強すぎる魔力がほんの微量だけ、俺の身体の外に漏れ出でているらしい。

その魔力が、俺が無意識のうちに思った「この世界で言葉が通じないのは困る」と言う願望を読み取つて勝手に魔法を使つしているんだと。

「魔法を使つてるとときは普通、翼ができるんじゃなかつたのか」つて訊いたら、「持続する魔法は始めの魔法をかける時だけであるのだよ。まあ、君の場合、魔力が強すぎて軽く規格外だから、簡単な魔法は翼なしでもできるんだけどね」だそうだ。

2・ま・じ・で・す・か（後書き）

夏休み中は週2回ペースを目指します！！

3・家族と親友（前書き）

ユニークアクセス数500突破！！！
ありがとうございます！！！！

3・家族と親友

説明を聞き終えて、俺は頭の中を整理しながら訊いた。

「クシラにいる俺の家族やタクは、俺が急にいなくなつてどうして
るかわかるか?」

これは、冷静に物事を考えてから一番気になつたことだった。

ここに出てきたタクつて名前は俺の唯一の友人であり親友の河内
拓夢である。

俺は、クシラで、……まあ、悲しい話だが、友人というものは一
人しかいなかつた。

原因は完全に俺で、小学校のころから、いつも前髪でほとんど顔
を隠して学校の教室でも一人でひたすら読書にふけつて友人を作る
気はまつたくなかつたからだ。

はたから見たら、ものすごく暗い奴に見えたことだらう。そんな
俺に声をかけてきた唯一の奴である。

小学5年の春に、クラス替えで同じクラスになり、何を思ったか、
俺に話かけてきて腐れ縁とでもいうのか、中学高校も同じになり、
俺の唯一の友人となつた人物である。

そいつと、家族が俺が急にいなくなつてどうしてゐるのか、気にな
つていたのである。

物思いにふけつていた俺は琳希の声に現実に引き戻された。

「河内拓夢は君のことをすごく心配していたようだ。

君の家族は君がいた時と何も変わつていないようだが、君の家族は
薄情者なのか?」

「琳希はしらないのか?」

「「」」の情報はクシラの神経由だからね。君の家族のことまで私はわからないよ」

「神様にも知らない」とはあるらしく。

「別に家族仲が悪いわけじゃないだ。俺の家の家族は変わり者ばっかりなんだよ。

だって、前に姉貴が「10日家に帰つてこなくても何も言わねーんだぞ」

たしか、俺が中学に入つてすぐのことだった。

5歳上の姉貴がいきなり行方をくらました。父さんや母さんが「そのうち帰つてくる」と言うもんだから俺はそうなのか、と思いながら日々を過ごしていたら10日後に帰つてきて、第一声が、

「山籠りしてた！！」

だった。

そのあともたびたび、姉貴は行方をくらまし、暇なときは俺もついて行つたりしてたもんだから、親は多分気にして無いだろうとも想像がつく。姉貴にいたつては「とうとうセイも一人で行くようになつたかあ」とでもいつてそつだ。

タクには行方をくらます前はちゃんといつも連絡入れてるから今回は心配しているだらうなあ。

そのことを話すと琳希はポカン、とした顔をした。おお、神様のこんな顔見た奴とか俺が初めてじゃね？

「君の家族は自由すぎないか……」

「そうかあ？」

俺が疑問符を浮かべるとため息をつかれた。失礼なやつだな。

そんなことより、俺は琳希に頼みたいことがあった。

「なあ、俺はクシラにいけないのか？　せめて、タクには事情を説明したいんだが。ってか、もう俺、一度と家族やタクに会えないのか？」

「すまないが、君はもうクシラには戻れない。……だが、手紙ぐらいなら私経由で渡すことができるが、書くか？」

家族やタクに会えないのはつらいが、手紙を渡せるのはねがつてもないことだった。

「もちろん、書かせてもらう。つってもこの身体の状態じゃ当分無理だけだな」

現在の俺は身体を動かすことすらままならない健康状態だ。手紙を書くのは当分先のなりそうだった。

「そうか。それなら君が起き上がるよくなつたらまた来よう」「おひよひしく頼む」

そう言つた時には神の姿はどこにもなく、換えの服を持ったカンナが俺の部屋に入つてくるところだった。

3・家族と親友（後書き）

あれ？もしかして短い？

すいません！！けど、ここが一番キリがいいんです。

ちなみに、聖夏は4人家族で両親と姉1人です。

姉だけ名前が決まって『秋葉^{あきは}』です。

この家族と親友の番外編を余裕があれば書くつもりです。

4・見た目つて大事だよね。

俺は起き上がりやすくなってしまったすぐには家族とタク宛てに手紙を書いて琳希に渡した。

その後は特に変わったこともなく過ぎ、とつとう俺は立つて歩けるまでに回復した。

歩けるようになつてまずびっくりしたのは、俺の姿だった。

部屋の鏡はベッドから離れた所にあつたからこっちの世界にきてから今まで自分の姿をみたことがなかつた。唯一わかつていたのは、髪の色が俺は黒だつたのに対してオウラの髪はルビーみたい紅い色ということだけだつた。

鏡に映つた俺の姿はずつとベッドでふせつていたせいで、瘦せてはいるが確かにもとの俺とまったく同じ顔をしていた。

そして、一番驚いたのは、眼の色だつた。眼の色が角度によって縁に見える蒼だつた。実はこの色、俺の元の身体と同じ色なのだ。クシラで俺がずっと顔を前髪で隠していた理由がこれだつたりする。

思わず鏡に映る自分の平凡な顔を凝視してしまつた。

（またなのか！）

思わず心の中で絶叫してしまつた。

家族は全員黒田黒髪のなかで俺だけ生まれた時から眼の色がおかしかつた。

父さんと母さんは近所でも有名になるくらいのおしどり夫婦なので、誰も母さんの浮気は疑わなかつたらしい。それに、親戚から強く勧められて結局遺伝子検査をやつたら、やつぱり父さんと母さんの子供だつたんで二人は特に気にせず突然変異の類だつと思つたんだと。

けど、この眼のせいで小学校のころ、変なコレクターのおっさん

にさらわれかけてから俺はずつと前髪で顔を隠していた。

にしても、久しぶりに自分の顔をしつかりみたな。

髪の色が、紅い以外ホント、なんのちがいもねーなあ。

俺が鏡を凝視してたのを、何を勘違いしたのかカンナが、「だ、大丈夫です！！ 痩せてあなたはとてもおきれいです！！」とか言いやがった。

思わず全力で言い返してしまいましたよ、ええ。

「は？ おきれいです！？ 誰が！？ 俺のこと言つてるなら、いつぺんお前眼球洗つてこい。

お・れ・は・平平凡凡な顔なんだ！ 君の眼には何？不細工でもきれいに見えちゃう不思議フィルターでもかかってるわけですか？」

オウラの仮面かぶる前から捨てちましたよ、ええ。

てか、演劇部でもない俺にとつたの反応でオウラの振りができるわけがないだろうが。

ああああああ！ 琳希にものすゞく文句言いてええええええええ！ 無理です、俺オウラの振りとかできません。どうするよ？ カンナ、ポカーンつて口あけたまんまとまつてるんですけどーー！

「え、え？ オ、オウラ様ですね？」

うーん、どうしたものか。

実は二重人格なんだ！ とでも言つてみるか？ 無理だな。だつて『二重人格』弱氣オウラの振りもする『だぞ！？ めんどくさいしややこしい！』

とぼけてみるか？ けど、やつてしまつてから結構時間経つてるし今更それもなあ。

しようがない。 無理を押し通すことにしました

「ああ。俺がオウラだ」

「へつ？ お、俺？ オウラ様どうされたんですか！！」

「どうもしねーよ。もともとの性格が表に出ただけの話だ」

「もともとの性格つて.....」

「まあ、簡単に言つとだな、ねこ被つてたってこと。これが本来の性格だ。

だつて、身体弱いのに性格これとかダメだろ？ だから、軟弱なふりしてたわけ。

まあ、今思いつきり化けの皮はがれちゃつたけどね」

自分で言つといてアレだが、無茶苦茶のこと言つてるな、おい。
これ信じたらすじいよなあ。

「そりなんですか.....。驚きましたけど、その性格のオウラ様も素敵です！！」

わあ、どうじよつ。信じちやこましたよ。この子。
なぜあの無茶苦茶を信じる！？ これが、異世界クオリティなのが
か！？

ま、まあ、信じたならいいか。

「素敵つて.....。まあ、いいか。後、この性格の事は他の人達には
言つなかつ？」

「はい！ わかりました！ 一人の秘密つてわけですね！」

「一人の秘密つて.....。はあ。
なんとゆづか..... 純粋なやつだなあ。まあ、黙つてくれるな
らしいか。

「そうだ。せつたいにしゃべるなよ

「はい！ 大丈夫です！ 僕、今日でオウラ様の従者から外れるので心配いりません！！」

「は？ 外れるの？」

「はい。実は、僕の実家の方で父がそろそろいい歳なので帰つて領地を継げ、と前々から言わされてまして、オウラ様の体調が戻り次第帰ることになつてましたので。

最後にオウラ様の秘密を教えてくださいありがとうございました」

超いい笑顔で言いやがつた。

えー。異世界来て初めに会つた人つてたいがい主要人物じゃねーの？

驚いたけど、好都合かもしれない。オウラをよく知つてのカンナは正直、脅威以外の何物でもなかつたからな。

ん？ ジャあ、

「お前の後任は誰か決まつてるのか？」

「いいえ。まだです。決まるまでは他の使用人の方々が交代でオウラ様の世話をしてくださいさる予定です」

ふーん。まあ、どうでもいいか。後任が誰にならうと俺の知つたことじやないしな。

「そうか。今まで、ありがとうな」

「い、いえ、こちらこそありがとうございました。」

オウラ様に仕えるなんて、とても名誉なことです！ とても、とてももうれしかつたです。」

「そつか。元気にしてろよ」

「はい！..」

4・見た目つて大事だよね。（後書き）

もし、カンナ好きな人がいたらすいませんでした。
カンナ退場です。

今後出てくるかなあ。その予定は今のところありません……。

5・魔法の知識と従者探し

俺が起きることに支障がなくなつて一ヶ月、未だに次の従者がきまつていません。もう完治しましたよ、ええ。

部屋で前に琳希が来たときに唯一教えてもらつた魔法の『身体強化』使つたら1日で治りました。

体力もだいぶ戻つてきて動くのにまったく支障なしだつたりする。

ちなみに、この世界の魔法は『思念系』、『身体系』、『干渉系』『呪術系』の四種類に分類される。

『思念系』は相手や自分の精神に働きかけて、相手の思考を読み取つたり、記憶を改ざんしたりする魔法のことをいつ。この系統の魔法はよっぽど魔力が高くないと使用できないらしく、この世界で使用できる人物はほとんどいらないらしい。

『身体系』は俺が使つた『身体強化』のようくに自分の身体を強化したり治癒力を高めたりする魔法のこと。ゲームとかによくある『ヒール』も実際にこの世界にはあるらしく、ここに分類される。

『干渉系』は本来、『干渉』の言葉の前に『自然』がついて正式名は『自然干渉系』。よくゲームにある自然の力を借りた『ファイヤ』や『ウインド』などの攻撃魔法のようなものだ。要するに、自然に魔力で干渉して、攻撃したりするもの。あと、『テレポート』とかの空間転移もこの中にに入るらしい。

それで、最後の『呪術系』は、まあ、まんま『呪い』だな。ただ、人を呪わば穴二つってことで、それなりのリスクもあるらしい。それに、これは使用したら犯罪で、問答無用で、死刑。さすがにこれはちょっと驚いた。

あと、本当にちょっとした魔法ではない限り、魔法を使用するには媒体を必要とするらしい。（ちなみに、俺が規格外なもので、軽

い魔法に分類される俺の言語理解の魔法は、媒体無しでいけるらしい。とことん規格外だな、俺。）

媒体の形はいろいろあり、典型的な杖があれば、剣がその役目を兼用するものもあり、はてには一見アクセサリーにしか見えない指輪やピアス、ネックレスなんてものもある。

媒体はそれ専用の職人がいて、職人の腕がいいほど良質の媒体になつて、魔法を使う際に必要とする魔力が軽減されたりと、特典があるらしい。ちなみに、俺の媒体は『身体強化』を教えてもらつたときに琳希にもらつた、俺の眼の色とよく似た石の付いた細い金鎖の腕輪だ。「こんな細い鎖で切れないのか?」って訊いたら「神の特別製だ。絶対に切れないよ。」だそうだ。

魔力なしのオウラは媒体持つてなかつたから喜んでもらいましたよ、ええ。

なんでこんなにすらすらと、説明できるのかというと、君も魔力あるんだからちゃんと魔法について、本を読むなりして勉強しておくように、つて琳希に言われたし一応、動けない間に本を持つてきてもらつて勉強した結果ですよ、ふふん。

……つて、そんなことより従者だよ。

おいおい、いいのかよ。いくら『魔力なし』だからつて完全放置はどうよ。

まあ、そんなわけで自分から従者探しすることにした。

だつて、従者だつたら一人付ければいいだけなのに、そこらへんにいた兵士だか、近衛だかわからんやつらは、部屋の外に出るためだけに最低でも3人は付いてくるんだぞ?

いい加減うつとおしい!!!!

と、言つわけで、従者探しin城内。

ちなみに、兵士だか近衛だか分からんやつ（もう兵士でいいや）は、まいてきた。今頃必死で俺を探しているだろつ。

本日の兵士の人数は5人でした・・・。正直、かなりうつとおしいし、俺がまあまあ高い身分つてのがまるわかりになるのがイヤだつたんでまいてきました。

さて、どんな奴がいるかなつと。

5・魔法の知識と従者探し（後書き）

諸事情により、更新停滞の可能性があります。
気長に待つていただけると嬉しいです。

6・なぜお前が「J-POP」？（前書き）

な、なんとか更新できただけだ……。
次の更新は九月になります。

6・なぜお前がここにー?

……広すぎね?この城。

もう軽く迷子ですよ、こんちくしょう。

今はどもこの城に4つある中庭の一つにいるようだ。この城の中庭は王族用と城で働く文官の休憩用と軍人の訓練場用と使用人用の用途に別れている。

さつきから結構使用人がここを通るのを見てるから、多分、使用人用の中庭に来ちゃったような。

ま、いいか。確かに、従者は使用人の中のまあまあ魔力の高い奴から選ばないといけないから目的を果たすには丁度の場所だし。

うーん。ピンとくる奴が一人もいねえ。

どうしたもんか……。中庭にある木製の椅子に腰かけてひたすら、来る奴来る奴を見てみたが……。

似たような奴ばかりなんだが。

たまに、こんなとこに座つてるいい服着た奴が珍しいのか、ちらちら見てくる奴がいるが正直そいつらも微妙だしなあ。（魔力が高いせいか、なぜか相手の魔力量がかなりアバウトだが、だいたいわかる。超便利。）

「こんなとき、タクがいればいいんだけどなあ。」

文武両道で気の合つ親友タクを思わず思い出してしまう。

あいつだつたら、話し相手にもなるし、かなり楽しいと思つ。

「どうした?聖夏。」

「いや、こういうときタクがいてくれたらなあつて……ええええええええええ！」

思わず大声を出してしまつた。

「タ、タクー? なんでここにー?」

「この世界にいないけはずの親友、河内拓夢が目の前にいつ通りの笑顔を浮かべていた。

なぜに！？ 予想外すぎる！

「お前、それにしても髪が紅いなあ。染めたのか？しかも、髪の毛ちゃんとしてるから、一瞬、聖夏かわからなかつたぞ。お前、その髪、秋葉さんにやられて以来じやないのか？」

秋葉つてのは、よくいなくなる俺の姉貴のこと。昔、前髪をピンで無理やり留められて、整えられたことがある。タクの言っているのはそのことだらう。確かに、今の俺は長い前髪をピンで留められて、背中の中ほどまである前髪以外の髪は一部、右の横で青いリボンでくくられている。ちなみに全部、この城のメイドさんによる。この世界じゃ俺のこの独特の眼の色は王族の印だそうで、特に眼を隠す必要も感じなくなつたので、全部まかせた。前の状態は前髪が眼に入る事が多々あつて、正直、結構痛かった。

……つて、いきなり話題逸らされた……。

「いやいや、質問に答えろよ……それに、お前の格好もどうしたんだよ」

タクはなぜか使用者の着るお仕着せを着ていた。

タクはかなりかつこいい部類に入る。確かに、学校で1・2を競うイケメン（死語）だ。

彼は茶髪を肩のあたりまで伸ばして茶色の眼をしている。確かに、代々色素の薄い家系だとかなんとか。

そんな奴が、使用者のお仕着せを着ると、ただのお仕着せさえ格好よく見えてくる。

んで、なんでそんなタクがここにいるんだ？

「おお？ お前、なんで俺がここにいるんだ？ つて思つてるだろ」

「おお、さすが親友。思つてることが以心伝心。

「じつはなあ、琳希さんが連れてきてくれたんだ」

「は？」

「お前、手紙くれただろ？」

ああ、やつた。たしかに手紙は琳希に渡してやつたが、
「それがどうしてこうなる！？」

6・なぜお前が「」だ？（後書き）

ちょっとキリが悪いです。

こんなのお気に入りに登録してくださつての方々、ありがとうございます！

が、頑張りますので見捨てないで更新を頑張りお待ちいただきた
いです……

7・感動（前書き）

お久しぶりの更新です。
テスト、オワタ＼（。ロ＼）（＼ロ。）／
夏休みもオワタ（・・・）

俺の叫びを気にせず、笑顔でタクは説明しやがった。

「いや、さあ、手紙が異世界渡れるなら人もいけるんじゃね？ つて手紙届けに来た琳希さんに訊いたら、行けない事もないつて言われたんでそれじゃあ、連れてけつて言つて連れてきてもらつた」
「おいおい、勝手に人の親友になんてことをしてくれてるんですけどねえ、琳希さんよお。というか、タクがこっちに来れるのなら、俺はなんでクシラに行けないのかなあ？」

思わず呼びつけちまつじやないです。

「琳希、いるのか？」

俺の前に琳希が音もなく現れた。

「やつと出会つたか、君たち？」

「お、久しぶりです。琳希さん」

タクが現れた琳希にお気楽にも手を振つてゐる。何で呑氣に挨拶できるかな。あー、殴りたい。

「久しぶりだね、拓夢。どうやら無事出会えたようだなによりだ」

「いえいえ、こちらこそ、無理言つてすいませんでした」

「和やかに会話をするな、お前ら。……琳希、一から全部説明しろ。

タクがこっちに来れたのなら、俺は戻れるんじやねえのか」

「そう怒るな、聖夏。クシラからこちらへは一方通行だ。こちらに来ることは可能でも、神ではない限り、クシラに戻ることはできない。だから、君に、戻れないと言つたのだ。……そして、彼は全部わかつた上でこちらに来ている」

「そつなのか？タク」

「お前がホントはこの世界で生まれるはずだったことも、もう元の世界に帰れないことも全部しつてるぜ。その上で、俺はこちらきてお前の手伝いをしたいと思つたんだ」

俺はいい親友を持ったなあ……じゃなくて……

「お前もつ、2度とあっちの世界に帰れないんだぞ！」

「向こうの友達はどうする気だ！？」

「お前より、大切な友達なんていねーよ」

「うわっ、恥ずかしいことを真顔で言つな！」

「こいつ、たまに素で恥ずかしい」と言つんだよなあ。ため息がでる。

「ハア、もう、いい。お前がそこまでわかつて來てるのなら何も言わねーよ。

お前に家族のことなんて言つても仕方ないだろうしな」「よくわかつてるじゃないか」

「こいつの家族はかなり複雑な事情で、両親ともにいなく、母方の祖母がタクの面倒を見ているが、ばあさんはタクのことを恵み嫌つていてとても仲がいいとは言えない。

ばあさんはほとんど責任放棄で、しかも金持ちなもんだから、タクの生活費をかなりの高額とえてタクをマンションで一人暮らしさせてる。

それで面倒見た気になつてるらしい。

まあ、そんなわけでタクもばあさんが大分嫌いらしい。

だから、家族の事はタク的にはどうでもいいことなんだろう。

「んで？ タクはこいつちに来てたんだ？」

「えーと、3日くらい前からかなあ」

「そうなのか。……ん？ そういえばお前、気分は大丈夫なのか？」

俺が言つているのは魔力酔いのことだ。

タクはクシラの人間のはずだから魔力は無い。だから、オウラの様に魔力にあてられてないのか心配になつた。

「ああ。大丈夫だぞ。お前の言つてるのって魔力酔いのことだろ？」

そのことなら心配いらないぞ。俺もそれなりの魔力をもつてゐるからな

「は？ どういうことだ？」

「琳希さんに頼んで、魔力をもらつたんだ」

そんなことができるのか！？

んじゃ、オウラにそれすりやあ俺がここに来る必要なかつたじやねーか。

琳希を思いつきり睨む。

「そんなに睨まないでくれ。君の言いたいことぐらいわかる。オウラにもそうすればよかつたではないか、とでも思つてゐるのだろう？ だが、元々ないものを無理やり魂に入れるのだ。魂にかかる負担はかなりのものだ。元から弱つているオウラの魂はそんなことに耐えられない。それに、魔力を与えると魂にかけられる負担によつて失神しそうなほどの激痛にさいなまれる。

拓夢はそれでもいいと言つたから魔力を与えたのだ。しかも、拓夢は君、聖夏の足手まといになりたくないから、多くの魔力を与えて欲しいと言つてきた。よく、死なかつたものだ、と感心するくらいの激痛があつたはずだ

「お前つ……」

言葉が出なかつた。感動しすぎて。

7・感動（後書き）

続きが思いつかないつ……。

感想いただけると嬉しいです。

批判、指摘大歓迎。

8・下調べ（前書き）

遅くなりました……。

んで、まあ、タクを見つけてから3日がたつた。ちなみに、今のタクの立場は俺の従者だ。結構簡単に手続きできた。よかつた、うん。

従者ができる今俺は移動時に兵士に囮まれることもなく、フリーダム。城の中を自由に行き来可能になつたから、タクを連れて歩きまわつた。しかも、侍従の格好で。

身体体系の魔法『カララー』を使って髪と眼の色を黒に変えて、タクに服を借りて。

タクの服は侍従の服だ。普通の白シャツにベストを上に羽織る、シンプルな格好。侍従達はタイや、リボンを着けて、自分の職場や、階級を表す。タクは、俺の従者になつたから、本来のリボンの色は王族の眼の色になぞらえて光沢のある青だが、今は侍従の色の赤だ。ちなみに、俺のリボンも赤。

こつちの方が目立たないから、こうしている。

結構、みんな髪と眼の色を変えただけの俺のことに気づかない。元々病弱で、しかも皇族の恥さらし、『魔力無し』のオウラはほとんど表舞台にでてきてないのも理由の一つだろう。

にしても、侍従の格好で歩きまわるのはなかなか、面白い。

新しく入つた同僚だと思つた使用人仲間たちが、貴族の色々な話を聞かせてくれる。これがなかなか良くて、結構アホな、誰誰があるお嬢様に告白して振られた、という話から、そんな重要な話何で知つてゐるんだ、つて言いたくなるような政治の話まで、何でもアリだ。

まあ、この噂話が俺が侍従の振りをする最たる理由だが。

知つての通り、俺はこの世界に来てすぐに殺された。その理由が知りたい。

正直、あの時の事は死んだ時のショックか、見事に記憶がとんでいる。だから、俺が憶えていることは、学校の帰りに気が付いたら首を切られて死んでいた、というわけのわからないものだ。

やっぱり、自分の殺された理由ぐらい知つておきたい。本当はすぐにも動き出したいところだったが、体調がなかなか戻らず、兵士たちが何人も付いてきたので、できなかつたのだ。しかし、タクが従者になつたので、やつと行動に移すことができた。タクもこのことについて、快く了承してくれた。

というわけで、侍従達の噂話から、その理由を探そつと思つたわけだが、これが結構うまくいつた。結構前の事だからわからないかと思ったが、かなり使用人たちの印象に残る出来事だつたらしく、すぐにわかつた。

なんでも、俺はいきなりこの城に現れたらしい。そして、俺が現れたのは地上から3メートルほど上だつた。そして、俺の真下には、父親の地位があまあまあ高く、それを笠に着て普段から色々やんちやをしていたお坊ちゃん。「わ、私の上にいきなり落ちてくるとはどういうことか！」「と言つて俺の首を持っていた剣でバッサリいつちゃつたらしい。

それで、息子に甘い父親の権力が働き、表向きにはその坊ちゃんの命を狙つた不届き者を坊ちゃんが返り討ちにした、ということにしたらしい。さすがに、その親ばかでも、「いきなり上に落ちてきましたから息子がバッサリ斬つちゃいました」とは言いにくかつたらしい。まあ、普通、誰か、くらい確認するよなあ。

だから、そのオヤジは俺を息子の命を狙つた犯罪者とすることにした。そうすることで、その息子のアホな行為を、暗殺者を返り討ちにした、という格好いいものにしたかつたらしい。それで、俺の首は公衆の面前に、犯罪者としてさらされた、と。

アホオヤジの計画はほぼ、成功していたが、それはそれ、この城で起きたことである。ぱつちり、数人の使用人はその時、それを見ていた。そして、その使用人たちがこの話を他の使用人に話していく、その噂は広まつたから、使用人たちは眞実を知っていた。

それで、その話を俺は聞けた、ということ。

「よし。復讐にいってきます」

今は俺の部屋にいる。そして、さつき聞いてきた話を整理した後に俺が言つたのが「復讐にいってきます」。

「え？ どうやって復讐する気なんだ？」

復讐に對しては何もツッコまないタク。それもどうなんだろ？…。

「微妙な顔しないでくれ、聖夏。俺がなんで復讐に對して何も言わないか気になるんだろ？ けど、俺はただたんに復讐を俺が止めた後のお前が怖いだけ」

「どういう意味だ、おい。

「だつて、お前ひたすら俺の横で相手に對する文句を呪詛みたいにぶつぶつ言つんだもん。めつさ怖えーんだよ。それで結局、止めるのやめちゃうんだよ。しかも、すぐにやらなかつた分、ストレス溜まるのが、復讐法方がえぐくなる」

そうだつて。いつの話だろ。全然わからん。

「聖夏、中学の時、同じクラスの女子に髪切られたろ」

ああ、そんなこともあつたつて。

それは確か、俺の姉の秋葉が俺の髪を顔がさらされぬよう、ピンで留めて登校させた後のことだ。

そのとき、俺の顔はカツコいいと学校中に広まつた。けど、正直、自分の顔がカツコいいとかよくわからん。タクいわく「なみのアイドルよりカツコいい」らしい。

毎日鏡で見る顔だし、昔からこの顔だ。カッコいいとかいわれても……。

まあ、そのカッコいい顔を隠したらダメとか、わけのわからんことを言つてきて俺の前髪を切ろうと数人の女子が俺に特攻仕掛けてきた。お前ら、ただ、俺の顔を見たいだけだろ、と思つて無視しようとしたら、切れた一人の女子が俺の前髪をバサリいきやがつた。

普段温厚な俺でも切れますよ。その場でその女子どうやつてに復讐しようと想っていたら、肩をタクに叩かれて止められた。その時は昼休みで次の授業があつたからしじうがなく引き下がつたが、その後ひたすら、その女子に対する呪詛をはいていた気がする。あれがこわかったのか。そういえば、その後タクに「気が済むまでやつてこい」と言われた。あの時は復讐できるのに喜んで特に考えてなかつたけどそういうことだったのか。俺が怖かつたと。

結局、その女子は丸刈りにしてやつたが、それも怖かつたと。ふーん。

ま、いいや。復讐させてくれるなら。
さて、どうやって復讐しようかな

9 タクの特技（前書き）

短
つ
！

9・タクの特技

俺の首をスッパリ斬りやがったお坊っちゃんのことが分かつて十数日たつたころ。俺はまたしても使用人の格好をして、城をうろついていた。ある書類を読みながら。

「何見てんの？　」というか、よく読みながらスイスイ歩けるなあ。俺だつたら確實に途中でつまづいてこける！」

「ふーん。んで、これか？」

「あれ？　スルー？」

「うん。スルー。」

「これははちょっと前にあのシュー・ベルトか、ドーベルマンか、言う名前の坊っちゃんのことを調べるために一寸、拝借した奴のことに関する書類。あの坊っちゃんの家、なかなか面白いぞ」「聖夏一、シュー・ベルマン家な」

「ああ、そんな名前だっけか。どうでもいいだろ？」

何かタクの落ち込むようなため息が聞こえたけど気にしない。どうせ、すぐもちなおす。

「タクも読むか？」

「ああ。読む」

「俺は今まで読んでいた書類をタクに渡してやるつと…………うん？　あれ？」

「タクつてこっちの文字読めるのか？」

「読めるぞー。勉強したからな」

「いや、勉強つて……。こっちの世界に来て半年も経つてないの

に文字をマスターしたのか、この阿呆は。

「おーい、聖夏。今す”く失礼なこと考えただろ！」

くつ、こいつはエスパーか？

「俺の特技忘れたか？」

……………はい？……………あ、ー、忘れてた。

まあ、口に出して言つたら呆れられるから心の中でしか言わないけどな！

タクの特技。それは抜群の記憶力だ。ただ漫画や小説のような完全記憶能力、つて言えるほどのものじゃない。例えば、凄く混雜した道で次々すれ違つた人の顔を全部完璧に覚えるなんてことは流石にできないし、今日喋つたことを一字一句間違えずに始めから全部言え、なんてこともできない。ただ、意識して、少しでも興味に思つたことは全て覚えることができるそうだ。タクはこの特技のおかげで学校の成績は常にトップだった。まあ、タクは登場人物の気持ちを読み取るような国語の問題が大の苦手だけだな。

ち・な・み・に、俺は常に校内順位トップ10に入る成績だったと言つておーう。じ、自慢じゃねーぞ！！

……………ま、まあ、それは置いておいて、記憶力のいいタクは、その記憶力で文字を覚えたんだろう。

文字を読むのに支障がなさうなので改めて、書類を渡す。

「ほら。こけるなよ」

「あれ？俺のために一旦止まるつていう選択はなしなんだ」

当たり前だ。だいたいこんなところで止まつたら邪魔以外の何者でもない。現在、城の少し狭い使用人ばかりが使う通路にいる。大量の洗濯物をのせたまあまあのでかさのカートが通ることもあるここで立ち止まると端によつてもかなりの邪魔だ。

「それに、タクがそんな簡単にこけるわけないだろ?」

「こいつは何でもできる万能タイプの人間だ。」

今現在も書類を読みながら俺と喋つてゐる。しかも歩きながら。俺は呆れてため息をついた。

「お前の方がよっぽど器用だらうが……」「そつかー?」

自覚がないのに腹が立つのが。
殴つていいのか?いいよな、それくらい。あー、殴りたい。こんな万能人間何で存在するんだ?

「…………聖夏」

俺が悶々と考えこんでいると書類を読み終わつたタクが声をかけてきた。

「…………つて、読み終わるの早くないか!?」

俺が書類渡してから20分もたつてねーぞ。

「速読はマスター済みだぜ!」

「いい笑顔で断言するなよ…………。速読にしても早過ぎるだろ?が。軽く人外だろ。」

「失礼な。……って、速読はどうでもいいんだよ、聖夏。そんなことよりもこの書類の内容、色々な意味でかなり不味くないか？」
「不味いだろ？　うな」

9・タクの特技（後書き）

お久しぶりの更新です。
申し訳ありません……。

10・結果？（前書き）

お待たせしました……、あれ？待ってた方いるのかな（汗）
と、とりあえず、続きを読べ。

その書類の内容は貴族の国庫横領について、だ。

シュー・ベルマン家を調べていたら、芋づる式に出てきた事実で、完全なる副産物なんだが。いやはや、調べていたらシュー・ベルマン家がかなりの金額の横領をしていたのが、わかつたからどうせだし、他にやつていてる奴はいるかなーと調べたら、ぐるぐるでるわ、大物貴族の名前が大量に。

え、政治腐つてしません？って言いたくなるくらいですよ、そりやあ、もつ。

「んで、どうするんだ？」

「何が？」

「いやいや、聖夏は一応この国の皇子でしきりが。どうにかしなくてもいいの？」

「別に、どうもしないぞ。だいたい、俺なんかにわか皇子だし。いやとなつたら、どこでも暮らせる自信あるし」

いやー、ここまで調べておいてアレだが、うん。……心底どうでもいい。

もともと異世界から来た俺からしたら、どうでもこことなんどよなあ。琳希には、皇位継承、とか言われているけど、正直面倒です！ 家帰つてもいいデスカ？

「いや、君、帰れないし。しかも、一番大事な、こちらに呼んだ理由でもある皇位継承が面倒だと、いわれると大変こまるのだが」

こいつの間に！…とは、言わない。最近ショッカーハンさんなのだ

し。

「琳希。人の心を読むなよな」

「いやいや、さすがに君を呼んだ理由を全否定されたら黙つているわけにもいかないだろ？」「うう、言わてもなあ……」

「きなり、この皇子してね、って言われて、わかつた！ 立派にこの国の皇子を務めあげるよ……って言つ方が問題あるんじゃあないか？」

普通俺の反応が正常だと思つが。すべての思いを込めて琳希をジト田でみやる。

「うう……！ そんな田で見るな！ ああ、確かに君の考えが正しいだろ？」「……」

「わあ、ジト田で見たらキレたよ、この神様。それぐらいでキレるなよ。

「こつちだつて色々事情があるのだよ…… ちゃんと皇子いらっしゃぐれ！」

「えー、でもなあ……」

めんどい。俺、自分の首飛ばしがつた馬鹿に復讐したいだけだし。貴族の不正発覚は完全におまけだし。やる気出ません。

「あーもーー じゃあ、君がやる気になるよ！」 しゃじりやあないか！ 頭に黙つていたことを全部教えてやりますやあないか！」

おお、やけっぽい。とこりうか、おー。

「黙つていたことってなんだ……？」

洗こぎやうらこ話しもりぬつか？

「聖夏ー、顔怖いぞー……？」

あ、ーー、聞こえない、聞こえない。

お詫び（小説の次話ではあつません）

最近更新ができず誠に申し訳ありません。

あと、この小説は設定を練り直し、話の中に出でた矛盾を消化し、きれいに直したものと、改訂版として、おわせていただきます。栖依が、見事なまでに、見切り発車した作品であつたため、書き進めていく内に大量の矛盾が発生し、書きが書けなくなりました……。

一重に栖依の力不足によるものです。大変申し訳ございません。

この文章を書いている今、改訂版はほぼ書けていますので、順次、upしてまいります。

作者ページからタイトル『セカイノハテ（改）』にお願いします。

ただ、来年度から、受験生となるため、更新速度が劇的に遅くなることが見込まれます。

できるだけ、upしていくつもりですので、どうぞよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3418m/>

セカイノハテ

2011年3月17日22時05分発行